

# 編集委員が 行く

## 重度障がい者を多数雇用 設立25周年の第三セクター

サンアクアTOTO株式会社（福岡県）

枚方総合発達医療センター 事務部 地域支援準備室 諏訪田克彦



### 取材先データ

#### サンアクアTOTO株式会社

〒802-0823 福岡県北九州市小倉南区舞ヶ丘1丁目2-1  
TEL : 093-964-0141



### 編集委員から

今回、初めて担当した「編集委員が行く」。取材をどこにお願いしようかと悩んでいたところ、私の故郷である北九州市にある「サンアクアTOTO」を思い起こしました。設立25年を迎えたサンアクアTOTOの、これまで取り組んできた障がい者雇用の状況と未来について、スタッフ、社員、広報の方々のご協力で、無事に取材を終えることができました。みなさまに心から感謝します。

Keyword : 特例子会社、特別支援学校、製造業、障害理解、職場環境の整備

写真 : 小山博孝・官野 貴



サンアクアTOTO株式会社

## POINT

- ① 「生産計画表」を作成し、計画的な仕事の遂行に努める
- ② 社会福祉の「ノーマライゼーション」の理念を取り入れた障がい者雇用
- ③ 製品組立業務からサポート業務へ、広がる職域



社員向けのトイレなど



社屋内、鮮やかな蛍光色の視覚障がい者用の誘導ライン



雨の日でも傘をささずにすむ、屋根つき駐車場

笑顔のお出迎へと、  
高さ10mの天井

本州と九州をつなぐ新関門トンネルを抜けた最初の駅、山陽新幹線小倉駅から車で約30分、緑豊かな住宅団地のなかに「サンアクアTOTO株式会社」がある。来客者用駐車場に車を停めると、正面玄関には私たちの到着を待つ3人の姿が見えた。サンアクアTOTO取締役総務部長の福田信宏さん、総務部総務課長の福田章恵さん、TOTO株式会社広報部本社広報グループの山崎明子さんだ。みなさん、笑顔で出迎えてくれた。

広い敷地内に建てられたサンアクアTOTOの社屋は平屋建てで、社屋全体が障がいの有無を問わず、働きやすい環境に配慮されたバリアフリー設計になっている。

駐車場は、雨の日でも車を降りてから傘をささずに社員通用口まで移動できるよう、屋根がついている。玄関を入ると、高さ10mの天井がある。火災時の煙溜まりに配慮した構造で、光が差し込む広々とした空間である。また、視覚障がい者の建物内での移動に配慮して、柱やドア、通路には、それらを認識しやすいよう鮮や

かな色の誘導ラインが使用されている。わかりやすさとともに、建物全体の清潔感も感じた。また、時計の上には聴覚障がい者のための回転灯が、工場内へ延びる通路にはディスプレイが設置されていて、だれもが工場内の情報を目視で確認



TOTO本社広報グループの山崎明子さん



総務課長の福田章恵さん



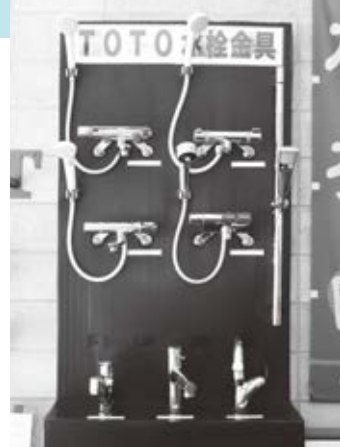
取締役総務部長の福田信宏さん



設計した治具を、3Dプリンターで成形する、組立課の廣畑慶美さん



シャワーのスライドバーの品質チェックをする品質管理課の清水幸寿さん



TOTO製品の水栓金具

できるようになっていた。

このように、さまざまな障がいのある社員が、安全に安心して働くことができるよう配慮がなされている。

\* \* \* \* \*

清潔で明るい廊下を歩き、私たちは会議室に案内された。会議室では、総務部長の福田信宏さん、総務課長の福田章恵さんから、本日のスケジュールと企業概要の説明をしていただいた。

サンアクアTOTOは、1993（平成5）年2月に、福岡県、北九州市、TOTOによる第三セクター方式の

重度障がい者多数雇用企業として設立され、今年で25周年を迎えた。社員142人のうち92人が障がいのある社員で、身体障がい

が49人、精神障がい

が28人となっている（2018年11月時点）。サンアクアTOTOでは、会社運営に障がい福祉理念である「ノー

マライゼーション」を取り入れている。具体的には、「社員と業務のマッチング」「心身に渡る就業支援」「仕事の計画的な遂行」「設備環境整備」が主な取り組みである。

なかでも私が注目したのは、個々の目標をわかりやすくするために、「生産計画表」を作成していることだ。

サンアクアTOTOでは、担当者が障がいの特性や仕事の習熟度に応じ、個人に合わせたピッチタイムを設定、その日の目標や仕事の配分、進捗を「見える化」することで、個々に合わせた業務支援を行うようにしている。

この考え方は、ノーマライゼーションの理念をベースとした「個の尊重」が反映されており、それぞれの社員の習熟度や課題に応じた目標設定により、障がいのある社員がチャレンジし続けられる環境を整備している。

## 製品組立工場

TOTOでは、水栓金具や給排水金具など、約150種類の製品の組立てを行っている。そのなかでサンアクアTOTOの主な業務は、「エアイン（※）シャワー」や「止水栓」などの製品の組立てと、製品管理だ。

まずはその製品組立工場に所属している障がいのある社員に話を聞いた。

品質管理課の清水幸寿さんは知的障がいがある。製品組立工場で、製品や部品の品質検査を担当している、入社7年目の社員だ。取材時には、箱詰めされたスライドバーの部品チェックをテキパキとこなしていた。清水さんは、「部品の数やスライド機能の確認を行うこの業務に、責任と誇りを感じています」と、元気に答えてくれた。

下肢に運動機能障がいのある、組立課の廣畑慶美さんは、サンアクアTOTOの社員が使用する、作業用治具の開発・製作を行っている。廣畑さんが設計したものは、その場で3Dプリンターで成形される。廣畑さんからは、「サンアクアTOTOで働く多くの仲間たちの困りごとを少なくして、効率的に楽しく仕事ができる治具を開発することが楽しい」と、前向きなコメントをもらった。

次に、社屋の玄関左側にある総務部へ向かった。ここで働く10人のメンバーの1人である赤星美穂さんには視覚障がいがある。赤星さんは、社旗の掲揚から始まり、社内のメールでの情報発信や、工場見学の準備など、さまざまな業務を担当している。パソコンには視覚障がい者用の文字拡大ソフトが組み込まれてい

※ 「エアイン」はTOTOの登録商標です



事務サポート課で働く立石貴行さん

部の設立当初は、肢体不自由を中心とする身体障がい者が多数を占めており、説明書の版下作成、CAD図面作成などをメイン業務としていたが、近年は精神障がい者の増加傾向にともない、新たな業務として、各種資料・図面のスキヤニング業務、顧客アンケート



総務課で活躍する赤星美穂さんは  
沖縄での全国アビリンピック大会で「パソコン操作」に出場

## サポート業務部

て、これによりディスプレイ上の文字を読み取り、業務をこなしている。さらに赤星さんは、昨年11月に行われた全国アビリンピック沖縄大会で、「パソコン操作」競技の福岡県代表選手としても活躍した（7ページで紹介）。赤星さんは今後の抱負について、「技術の向上だけでなく、何ごとにもチャレンジ精神を持ち、仕事も生活も楽しみたい」と爽やかに答えてくれた。

サンアクアTOTO敷地外の道路を挟んだところに、グループに分かれて業務を行っている部門がある。サポート業務部だ。



制作課のベテラン社員、柴田あゆみさん

データの入力、各種カタログ・挨拶状などの袋入れと発送など、さまざまな業務へ職域を広げている。

そのなかの事務サポート課に所属する、精神障がいのある立石貴行たていたかゆきさんは、入社当時は組立工場部門に配属されたが、4年前から事務サポート課へ異動し、主にデータ入力を担当している。

異動当初は、慣れない作業での疲れや、入力ミスによるストレスから体調を崩し、休職したこともあった。「一時は退職も考えましたが、職場の上司やジョブコーチ、医師などの協力を得て、職場復帰の際は時短勤務から始め、いまでは何とかフルタイムで働けるようになりました」と、笑顔で話してくれた。

上肢と下肢に運動機能障がいのある柴田あゆみさんは、サンアクアTOTOで

勤務18年のベテラン社員だ。サポート業務部では制作課に所属し、取扱説明書などのレイアウトの作成を担当している。

日常的に電動車いすを利用する柴田さんは、通常業務とは別に車いすユーザーとして社内の設備、特にトイレに関する提案も行っている。インタビューのときも「車いすからトイレに移乗する際の介助負担を軽くできるように、便器全体が上下に移動できる機能が要だ、という提案を会社にしました」と熱く語ってくれた。

\* \* \* \* \*

工場内には、さまざまな工程をこなす作業台のそばに、「進捗表示バー」が設置されていて、その日の作業がどのような状況で進んでいるのか、障がいのある社員自らが判断し、表示できるようにしている。表示は、黄なら「予定通り」、青



柴田さん（左）を取材する諏訪田編集委員（右）



進捗表示バー。  
上から、黄「予定通り」、青「先行」、赤「遅れ」、緑「変化点」

は「先行」、赤は「遅れ」、緑は「変化点」を表している。

「進捗表示バー」を確認することで、エリアリーダーは表示内容に応じた声かけなどが可能となり、生産ラインの適切な管理を行っている。

さらに、グループごとに毎日ミーティングが開かれ、当日のスケジュールと目標の確認、社員からの質疑応答の時間が設けられている。

このような取組みを見て、障がいのある人もない人も、ともに支え合う文化と、サンアクアTOTOならではの、社員一人ひとりの自主性を尊重する空気のようなものを実感した。インタビューに協力してくれた社員5人も、それぞれの職場で社員としての自覚と責任を持ち、自身の役割を果たしている。障がいがあることを感じさせない「人」としての個性や、仕事に向き合う真摯な姿勢を感じた。

## 設立25周年を迎えて

最後に、総務部長の福田信宏さん、総務課長の福田章恵さん、本社広報グループの山崎さんの3人から、設立25周年を迎えた、これからのサンアクアTOTOの未来像についてうかがった。

総務部長の福田信宏さんは、障がい種

別の多様化に対応できるハード（職場環境）の整備と、ソフト（人材）の育成が必要だと語ってくれた。

事業開始当初に採用された障がいのある社員は、身体障がいのなかでも肢体不自由・運動機能障がいが多数を占めていたが、近年では、視覚障がいや聴覚障がいのほか、知的障がいと、特に最近では精神障がいのある社員が増えている。精神障がいのある人は、心身ともに疲れやすい傾向があるため、昼休みには会議室を開放し、昼寝休憩をうながしたり、社員食堂の窓際にカウンターテーブルを置き、外の風景を見ながら一人で食事ができるコーナーを設けるなど、障がい特性に配慮した環境整備を行っている。

また人材育成に関しては、採用前の研修を重視してインターンシップ制度を導入し、特別支援学校2年生、3年生在籍時にそれぞれ2週間、職場実習を体験してもらい、生徒がサンアクアTOTOの仕事を理解できるよう就業前教育が行われている。

総務課長の福田章恵さんは、ジョブコーチの資格も持ち、障がいのある社員一人ひとりの見守りと、相談を受けながら社員と会社をつなぐ重要な役割をになっている。入社当初は、障がいを理解することについてハードルが高いと感じていた

が、サンアクアTOTOで働くなかで、「障がいは個性」と考えるようになり、障がいに対する固定観念が変わった。また、肢体不自由のように「見える（外見でわかりやすい）」障がいと、知的障がい、精神障がいのように「見えない（外見だけではわかりにくい）」障がいについて触れ、「特に、外見だけではわかりにくい障がいのある人については、その人がなにを苦手にしていくかわかりにくい場合があるため、そのことをよく理解したうえで、得意な部分をさらに伸ばしていく支援を心がけています」と話してくれた。

本社広報グループの山崎さんには、TOTOが取り組んできた障がい者に配慮した製品開発と、研究の経緯、未来について、資料を交えた詳しい説明をしていただいた。

TOTOは、1964（昭和39）年の東京オリンピック開催の年に障がい者用トイレを開発し、ウォッシュレット（※）の前身となった「ウォッシュユアシート」の輸入販売を始めた。

1995年には、パブリックトイレ向け「バリアフリーカタログ」の発刊に始まり、2007年には機能面の向上だけでなく、それまでメーカーごとに異なるトイレットペーパーの位置、洗浄ボタン、呼び出しボタンの位置を、業界全体で共

※ 「ウォッシュレット」はTOTOの登録商標です

通化する取組みもやっている。TOTTOが障がい者配慮商品の取扱いを始めてから54年がたち、駅や病院や学校などの公共施設、商業施設などに設置されてきた「みんなのトイレ」や「だれでもトイレ」と呼ばれるものも、さらに進化を遂げている。

また、病院や福祉施設などのトイレでは、快適で安全な空間づくりを目標とした関連企業連携による「癒しのトイレ研究会」が発足している。トイレ内の臭い対策、転倒リスク低減のためのトイレ離座検知システム、視覚障がい者のためのトイレ床材の開発など、メンバー企業の商品を活用した提案や調査が行われ、TOTTOもそれに参加している。

山崎さんは「TOTTO本社として、サンアクアTOTTOを中心に障がい者雇用をさらに進めていき、TOTTOグループ内のインフラ整備と交流を広げたい。また、今後想定される労働力不足に対しても、ロボットやAIは人の補助であり、あくまでも人を大切に作る企業を目指したい」という。

## 取材を終えて 編集後記

私がサンアクアTOTTOを訪れたのは、今回で2回目になる。最初に訪れたのは

14年前。当時、私は大学院で「身体障害者の就労支援に関する研究」に取り組んでいた。私の友人がサンアクアTOTTOの社員として働いていることを頼りにして、障がい者就労の実態把握を目的に訪問見学したことを懐かしく思い出す。そして14年ぶりにうかがったサンアクアTOTTOは、建物は変わらず昔のままだったが、障がいのある社員の障がい種別は多様化し、それにとまなう職場環境の改善、さらに作業内容の広がりなど、大きな変化があった。一方で、14年前も現在も障がいのある社員と障がいのない社員の相互理解と協力が、「協働」という形で展開されている点が変わりがなかった。

「ノーマライゼーション」については、『世界一幸福な国デンマークの暮らし方』の著者で、N・E・バンクミケルセン記念財団理事長の千葉忠夫氏が、「障がいのない人が可能なかぎり自分たちと同じような生活を送れるように障がいのある人を支えることという解釈であり、特に「可能なかぎり」ということが重要」と、以前私が参加した、デンマークの日欧文化交流学院の講義で述べていたことを思い出す。

サンアクアTOTTOが会社の運営指針にノーマライゼーションを取り入れてからの25年間で、「可能なかぎり」の障がい

者雇用の歩みであり、「可能なかぎり」のチャレンジが、今後も引き継がれていくことを期待したい。

障がい福祉の領域でも、個別支援計画に基づいた施設利用者へのサービス提供や、特別支援学校における個別支援教育計画に基づいた教育など、個の尊重を重視した取組みが広がってきた。このように「ノーマライゼーション」がようやく理念の域を脱して「個を尊重する実践」へと変化してきている。今回の取材で、就労現場で障がい者の個の尊重が認められ、さまざまな障がい者の社会参加の場となっていることを再確認することができた。

先述の友人は、残念ながらすでに同社を定年退職しており、再会は叶わなかったが、後日電話でサンアクアTOTTOを訪ねたことを話すと、「それまでの人生では、障がいがあることに気兼ねしてお世話になります」という気持ちから離れられなかったけれど、サンアクアTOTTOではその気兼ねは必要なかったという。私も「そうやったん……。よかったね」と、思わず北九州弁で即答した。彼の思いがけない言葉から、ノーマライゼーションそのものが伝わってきたように思えた。